



SnapMirrorソースSVMを再アクティブ化する ONTAP 9

NetApp
February 12, 2026

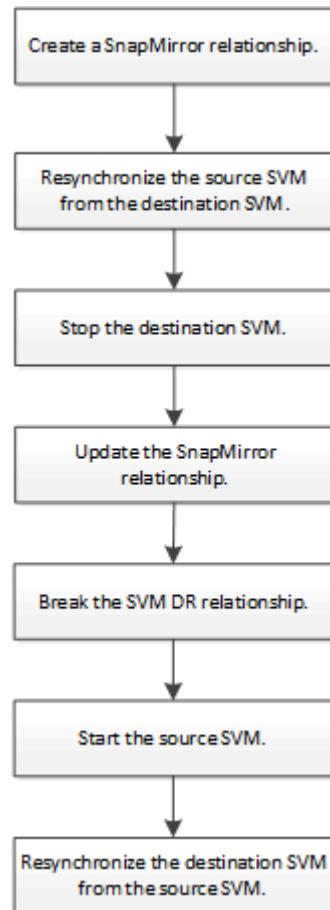
目次

SnapMirrorソースSVMを再アクティブ化する	1
ONTAP SnapMirror ソース SVM の再アクティブ化ワークフロー	1
元のONTAP SnapMirrorソースSVMを再アクティブ化する	1
元の ONTAP SnapMirror ソース SVM を FlexGroup ボリューム用に再アクティブ化する	8
ONTAP SnapMirrorデスティネーションSVM上のデータを再同期する	14

SnapMirrorソースSVMを再アクティブ化する

ONTAP SnapMirror ソース SVM の再アクティブ化ワークフロー

災害発生後もソースSVMが残っている場合は、そのソースSVMを再アクティブ化し、SVMディザスタリカバリ関係を再作成して保護できます。



元のONTAP SnapMirrorソースSVMを再アクティブ化する

デスティネーションからデータを提供する必要がなくなった場合は、ソースSVMとデスティネーションSVMの間で元のデータ保護関係を再確立できます。この手順は、1つの例外を除き、ボリュームレプリケーションの手順とほぼ同じです。ソースSVMを再アクティブ化する前に、デスティネーションSVMを停止する必要があります。

開始する前に

- デスティネーションボリュームからデータを提供している間にそのサイズを拡張した場合は、ソースボリュームを再アクティブ化する前に、元のソースボリュームを十分拡張できるようにmax-autosizeを手動で増やす必要があります。

"デスティネーションボリュームが自動的に拡張される状況"



クラスタ管理者は、データの損失を避けるために、元のソース SVM を再アクティブ化する前に、クライアントからの書き込みを一時停止する必要があります。

タスク概要

ONTAP 9.11.1以降では、SVM DR関係の逆再同期を実行する際に `snapmirror resync` コマンドのCLI `--quick-resync true` オプションを使用することで、ディザスタリカバリのリハーサル中の再同期時間を短縮できます。クイック再同期によりデータ ウェアハウスの再構築とリストア処理をバイパスできるため、本番環境への復帰にかかる時間を短縮できます。["ONTAPコマンド リファレンス"](#)の `snapmirror resync` の詳細をご覧ください。



クイック再同期では、デスティネーション ボリュームのストレージ効率は維持されません。クイック再同期を有効にすると、デスティネーション ボリュームで使用されるボリューム スペースが増加する可能性があります。

この手順は、元のソース ボリュームにあるベースラインが損なわれていないことを前提としています。ベースラインが損なわれている場合は、この手順を実行する前に、データの提供元のボリュームと元のソース ボリュームの間の関係を作成して初期化する必要があります。

ONTAP 9.8以降では、System Managerを使用して、災害発生後にソースStorage VMを再アクティブ化できます。

手順

このタスクは、System Manager または ONTAP CLI を使用して実行できます。

System Manager ONTAP 9.17.1 以降

1. デスティネーション クラスタで、必要な保護関係を選択します：*保護 > レプリケーション*をクリックします。
2. ソース名の上にカーソルを合わせて  をクリックし、*逆再同期*をクリックします。
3. *逆再同期関係*ウィンドウで、*逆再同期*をクリックします。

関係は **Replication** テーブルから消え、元のソース クラスタによって管理されるようになります。

4. 元のソース クラスターで、**Protection > Replication** をクリックし、状態に **Mirrored** と表示されていることを確認し、逆再同期が完了したことを確認します。
5. 元のデスティネーション クラスタで、クラスター > ストレージ VM に移動します。
6. ストレージ VM を見つけて、ストレージ VM 名の上にカーソルを置き、 をクリックして、*停止*をクリックします。
7. *ストレージ VM の停止*ウィンドウで、*停止*をクリックします。
8. ソース クラスタで、**[保護] > [レプリケーション]** に移動し、再アクティブ化するストレージ VM を見つけて、ストレージ VM 名の上にカーソルを移動し、 をクリックして、**[デスティネーションストレージ VM のアクティブ化]** をクリックします。
9. *デスティネーション Storage VM のアクティブ化*ウィンドウで、*デスティネーション Storage VM をアクティブ化して関係を解除*を選択し、*アクティブ化*をクリックします。
10. レプリケーション ページに戻ったら、もう一度カーソルをストレージ VM 名の上に置いて  をクリックし、逆再同期 をクリックします。

System Manager ONTAP 9.16.1 以前

1. デスティネーション クラスタで、必要な保護関係を選択します：*[保護] > [関係]*をクリックします。
2. ソース名の上にカーソルを合わせて  をクリックし、*逆再同期*をクリックします。
3. *逆再同期関係*ウィンドウで、*逆再同期*をクリックします。

リレーションシップは元のソース クラスタによって管理されるようになったため、**Relationships** テーブルから消えます。

4. 元のソース クラスターで、**Protection > Relationships** をクリックし、状態が **Mirrored** と表示されていることを確認し、逆再同期が完了したことを確認します。
5. 元のデスティネーション クラスタで、ストレージ > ストレージ VM に移動します。
6. ストレージ VM を見つけて、ストレージ VM 名の上にカーソルを置き、 をクリックして、*停止*をクリックします。
7. *ストレージ VM の停止*ウィンドウで、*停止*をクリックします。
8. ソース クラスタで、ストレージ VM (反転された関係のソース SVM) を見つけ、SVM 名の上にカーソルを合わせて  をクリックし、宛先ストレージ VM のアクティブ化 をクリックします。
9. *デスティネーション Storage VM のアクティブ化*ウィンドウで、*デスティネーション Storage VM をアクティブ化して関係を解除*を選択し、*アクティブ化*をクリックします。
10. 関係 ページに戻ったら、もう一度カーソルをストレージ VM 名の上に置いて  をクリックし、逆再同期 をクリックします。

CLI

- 元のソースSVMまたはソース クラスタから、元のSVM DR関係と同じ設定、ポリシー、およびidentity-preserve設定を使用して、反転したSVM DR関係を作成します。

```
snapmirror create -source-path <SVM>: -destination-path <SVM>:
```



`-source-path`および`-destination-path`オプションでは、SVM名の後にコロン (:) を入力する必要があります。以下の例をご覧ください。

次の例では、データの提供元となる SVM `svm_backup` と元のソース SVM `svm1` の間に関係を作成します：

```
cluster_src::> snapmirror create -source-path svm_backup:  
-destination-path svm1:
```

`snapmirror create` の詳細については、[link:https://docs.netapp.com/us-en/ontap-cli/snapmirror-create.html](https://docs.netapp.com/us-en/ontap-cli/snapmirror-create.html) ["ONTAPコマンド リファレンス"] を参照してください。

- 元のソースSVMまたはソース クラスタから次のコマンドを実行して、データ保護関係を反転します。

```
snapmirror resync -source-path <SVM>: -destination-path <SVM>:
```



`-source-path`および`-destination-path`オプションでは、SVM名の後にコロン (:) を入力する必要があります。以下の例をご覧ください。

再同期の際にベースライン転送は不要ですが、再同期には時間がかかる場合があります。再同期はオフピークの時間帯に実行することを推奨します。



ソースとデスティネーションに共通の Snapshot が存在しない場合、コマンドは失敗します。`snapmirror initialize`を使用して関係を再初期化します。

次の例では、元のソース SVM `svm1` とデータの提供元となる SVM `svm_backup` の関係を反転します：

```
cluster_src::> snapmirror resync -source-path svm_backup:  
-destination-path svm1:
```

-quick-resyncオプションの使用例：

```
cluster_src::> snapmirror resync -source-path svm_backup:  
-destination-path svm1: -quick-resync true
```

3. 元のソースSVMへのデータアクセスを再確立する準備ができたら、元のデスティネーションSVMを停止してSVMに接続されているクライアントをすべて切断します。

```
vserver stop -vserver <SVM>
```

次の例は、現在データを提供している元のデスティネーションSVMを停止します。

```
cluster_dst::> vserver stop svm_backup
```

4. `vserver show`コマンドを使用して、元のデスティネーションSVMが停止状態になっていることを確認します。

```
cluster_dst::> vserver show  
Vserver          Type      Subtype      Admin      Operational      Root  
Aggregate  
-----  
-----  
svm_backup       data      default      stopped     stopped      rv  
agg1
```

5. 元のソースSVMまたはソースクラスタから次のコマンドを実行して反転した関係を最後にもう一度更新し、元のデスティネーションSVMから元のソースSVMにすべての変更を転送します。

```
snapmirror update -source-path <SVM>: -destination-path <SVM>:
```



`-source-path`および`-destination-path`オプションでは、SVM名の後にコロン（:）を入力する必要があります。以下の例をご覧ください。

次の例では、データの提供元である元のデスティネーションSVM、`svm_backup`と元のソースSVM `svm1`の関係を更新します：

```
cluster_src::> snapmirror update -source-path svm_backup:  
-destination-path svm1:
```

`snapmirror update`の詳細については、link:<https://docs.netapp.com/us-en/ontap-cli/snapmirror-update.html>["ONTAPコマンド リファレンス" ^]をご覧ください。

6. 元のソースSVMまたはソース クラスタから次のコマンドを実行して、反転した関係のスケジュールされた転送を停止します。

```
snapmirror quiesce -source-path <SVM>: -destination-path <SVM>:
```



`-source-path`および`-destination-path`オプションでは、SVM名の後にコロン (:) を入力する必要があります。以下の例をご覧ください。

次の例では、データの提供元である SVM `svm_backup` と元の SVM `svm1` の間のスケジュールされた転送を停止します：

```
cluster_src::> snapmirror quiesce -source-path svm_backup:  
-destination-path svm1:
```

7. 最後の更新が完了して関係のステータスが「Quiesced」になったら、元のソースSVMまたは元のソース クラスタから次のコマンドを実行して反転した関係を解除します。

```
snapmirror break -source-path <SVM>: -destination-path <SVM>:
```



`-source-path`および`-destination-path`オプションでは、SVM名の後にコロン (:) を入力する必要があります。以下の例をご覧ください。

次の例では、データの提供元である元のデスティネーション SVM `svm_backup` と元のソース SVM `svm1` の関係を解除します：

```
cluster_src::> snapmirror break -source-path svm_backup:  
-destination-path svm1:
```

`snapmirror break`の詳細については、link:<https://docs.netapp.com/us-en/ontap-cli/snapmirror-break.html>["ONTAPコマンド リファレンス" ^]を参照してください。

8. 元のソースSVMを停止していた場合は、元のソース クラスタから元のソースSVMを起動します。

```
vserver start -vserver <SVM>
```

次の例は、元のソースSVMを起動します。

```
cluster_src::> vserver start svm1
```

9. 元のデスティネーションSVMまたはデスティネーションクラスタから、元のデータ保護関係を再確立します。

```
snapmirror resync -source-path <SVM>: -destination-path <SVM>:
```



`-source-path`および`-destination-path`オプションでは、SVM名の後にコロン（：）を入力する必要があります。以下の例をご覧ください。

次の例では、元のソース SVM `svm1` と元のデスティネーション SVM `svm_backup` の関係を再確立します：

```
cluster_dst::> snapmirror resync -source-path svm1: -destination-path svm_backup:
```

10. 元のソースSVMまたはソースクラスタから次のコマンドを実行して、反転したデータ保護関係を削除します。

```
snapmirror delete -source-path <SVM>: -destination-path <SVM>:
```



`-source-path`および`-destination-path`オプションでは、SVM名の後にコロン（：）を入力する必要があります。以下の例をご覧ください。

次の例では、元のデスティネーション SVM `svm_backup` と元のソース SVM `svm1` 間の逆の関係を削除します：

```
cluster_src::> snapmirror delete -source-path svm_backup: -destination-path svm1:
```

11. 元のデスティネーションSVMまたはデスティネーションクラスタから、反転したデータ保護関係をリリースします。

```
snapmirror release -source-path <SVM>: -destination-path <SVM>:
```



`-source-path`および`-destination-path`オプションでは、SVM名の後にコロン（：）を入力する必要があります。以下の例をご覧ください。

次の例では、元のデスティネーション SVM である `svm_backup` と元のソース SVM 間の逆の関係を

解除します。 svm1

```
cluster_dst::> snapmirror release -source-path svm_backup:  
-destination-path svm1:
```

次の手順

- ・`snapmirror show`コマンドを使用して、SnapMirror関係が作成されたことを確認します。

`snapmirror show`の詳細については、[link:https://docs.netapp.com/us-en/ontap-cli/snapmirror-show.html](https://docs.netapp.com/us-en/ontap-cli/snapmirror-show.html)["ONTAPコマンド リファレンス"]を参照してください。

- ・クライアントから元のソース SVM への書き込み操作を再開します。

関連情報

- ・"snapmirror create"
- ・"snapmirror delete"
- ・"snapmirror initialize"
- ・"snapmirror quiesce"
- ・"snapmirror release"
- ・"snapmirror resync"

元の ONTAP SnapMirror ソース SVM を FlexGroup ボリューム用に再アクティブ化する

デスティネーションからデータを提供する必要がなくなった場合は、ソースSVMとデスティネーションSVMの間で元のデータ保護関係を再確立できます。FlexGroupボリュームを使用している場合に元のソースSVMを再アクティブ化するには、いくつか追加手順を実行する必要があります。まず、元のSVM DR関係を削除し、元の関係をリリースしてから関係を反転する必要があります。また、スケジュールされた転送を停止する前に、反転した関係をリリースし、元の関係を再作成する必要があります。

手順

1. 元のデスティネーションSVMまたはデスティネーション クラスタから、元のSVM DR関係を削除します。

```
snapmirror delete -source-path SVM: -destination-path SVM:
```



`-source-path`および`-destination-path`オプションでは、SVM名の後にコロン（:）を入力する必要があります。以下の例をご覧ください。

次の例では、元のソース SVM `svm1` と元のデスティネーション SVM 間の元の関係を削除します。
`svm_backup`:

```
cluster_dst::> snapmirror delete -source-path svm1: -destination-path
svm_backup:
```

- 元のソース SVM または元のソース クラスタから、Snapshot をそのまま維持したまま元の関係を解除します。

```
snapmirror release -source-path SVM: -destination-path SVM: -relationship-info
-only true
```



`-source-path` および `-destination-path` オプションでは、SVM名の後にコロン (:) を入力する必要があります。以下の例をご覧ください。

次の例では、元のソース SVM である `svm1` と元のデスティネーション SVM `svm_backup` 間の元の関係を解除します。

```
cluster_src::> snapmirror release -source-path svm1: -destination-path
svm_backup: -relationship-info-only true
```

- 元のソースSVMまたはソース クラスタから、元のSVM DR関係と同じ設定、ポリシー、および`identity-preserve`設定を使用して、反転したSVM DR関係を作成します。

```
snapmirror create -source-path SVM: -destination-path SVM:
```



`-source-path` および `-destination-path` オプションでは、SVM名の後にコロン (:) を入力する必要があります。以下の例をご覧ください。

次の例では、データの提供元となる SVM `svm_backup` と元のソース SVM `svm1` の間に関係を作成します：

```
cluster_src::> snapmirror create -source-path svm_backup: -destination
-path svm1:
```

- 元のソースSVMまたはソース クラスタから次のコマンドを実行して、データ保護関係を反転します。

```
snapmirror resync -source-path SVM: -destination-path SVM:
```



`-source-path` および `-destination-path` オプションでは、SVM名の後にコロン（:）を入力する必要があります。以下の例をご覧ください。

再同期の際にベースライン転送は不要ですが、再同期には時間がかかる場合があります。再同期はオフピクの時間帯に実行することを推奨します。



ソースとデスティネーションに共通の Snapshot が存在しない場合、コマンドは失敗します。`snapmirror initialize` を使用して関係を再初期化します。

次の例では、元のソース SVM `svm1` とデータの提供元となる SVM `svm_backup` の関係を反転します：

```
cluster_src::> snapmirror resync -source-path svm_backup: -destination-path svm1:
```

5. 元のソースSVMへのデータアクセスを再確立する準備ができたら、元のデスティネーションSVMを停止してSVMに接続されているクライアントをすべて切断します。

```
vserver stop -vserver SVM
```

次の例は、現在データを提供している元のデスティネーションSVMを停止します。

```
cluster_dst::> vserver stop svm_backup
```

6. `vserver show` コマンドを使用して、元のデスティネーション SVM が停止状態になっていることを確認します。

```
cluster_dst::> vserver show
              Admin      Operational Root
Vserver      Type   Subtype   State      State      Volume
Aggregate
-----
-----
svm_backup    data    default   stopped   stopped    rv
agg1
```

7. 元のソースSVMまたはソース クラスタから次のコマンドを実行して反転した関係を最後にもう一度更新し、元のデスティネーションSVMから元のソースSVMにすべての変更を転送します。

```
snapmirror update -source-path SVM: -destination-path SVM:
```



`-source-path` および `-destination-path` オプションでは、SVM名の後にコロン（:）を入力する必要があります。以下の例をご覧ください。

次の例では、データの提供元である元のデスティネーション SVM、`svm_backup` と元のソース SVM `svm1` の関係を更新します：

```
cluster_src::> snapmirror update -source-path svm_backup: -destination-path svm1:
```

`snapmirror update` の詳細については、[link:https://docs.netapp.com/us-en/ontap-cli/snapmirror-update.html](https://docs.netapp.com/us-en/ontap-cli/snapmirror-update.html) ["ONTAPコマンド リファレンス"] をご覧ください。

8. 元のソース SVM またはソース クラスタから次のコマンドを実行して、反転した関係のスケジュールされた転送を停止します。

```
snapmirror quiesce -source-path SVM: -destination-path SVM:
```



`-source-path` および `-destination-path` オプションでは、SVM名の後にコロン（:）を入力する必要があります。以下の例をご覧ください。

次の例では、データの提供元である SVM `svm_backup` と元の SVM `svm1` の間のスケジュールされた転送を停止します：

```
cluster_src::> snapmirror quiesce -source-path svm_backup: -destination-path svm1:
```

`snapmirror quiesce` の詳細については、[link:https://docs.netapp.com/us-en/ontap-cli/snapmirror-quiesce.html](https://docs.netapp.com/us-en/ontap-cli/snapmirror-quiesce.html) ["ONTAPコマンド リファレンス"] を参照してください。

9. 最後の更新が完了して関係のステータスが「Quiesced」になったら、元のソース SVM または元のソース クラスタから次のコマンドを実行して反転した関係を解除します。

```
snapmirror break -source-path SVM: -destination-path SVM:
```



`-source-path` および `-destination-path` オプションでは、SVM名の後にコロン（:）を入力する必要があります。以下の例をご覧ください。

次の例では、データの提供元である元のデスティネーション SVM `svm_backup` と元のソース SVM `svm1` の関係を解除します：

```
cluster_src::> snapmirror break -source-path svm_backup: -destination-path svm1:
```

`snapmirror break` の詳細については、link:<https://docs.netapp.com/us-en/ontap-cli/snapmirror-break.html> ["ONTAPコマンド リファレンス" ^] を参照してください。

10. 元のソースSVMを停止していた場合は、元のソース クラスタから元のソースSVMを起動します。

```
vserver start -vserver SVM
```

次の例は、元のソースSVMを起動します。

```
cluster_src::> vserver start svm1
```

11. 元のソースSVMまたはソース クラスタから、反転したSVM DR関係を削除します。

```
snapmirror delete -source-path SVM: -destination-path SVM:
```



`-source-path` および `'-destination-path` オプションでは、SVM名の後にコロン (:) を入力する必要があります。以下の例をご覧ください。

次の例では、元のデスティネーション SVM である `svm_backup` と元のソース SVM `svm1` 間の逆の関係を削除します：

```
cluster_src::> snapmirror delete -source-path svm_backup: -destination-path svm1:
```

12. 元のデスティネーション SVM または元のデスティネーション クラスタから、スナップショットをそのまま維持したまま、逆の関係を解除します：

```
snapmirror release -source-path SVM: -destination-path SVM: -relationship-info-only true
```



`-source-path` および `'-destination-path` オプションでは、SVM名の後にコロン (:) を入力する必要があります。以下の例をご覧ください。

次の例は、元のデスティネーションSVM `svm_backup`と元のソースSVM `svm1`の間の反転した関係をリリースします。

```
cluster_dst::> snapmirror release -source-path svm_backup: -destination-path svm1: -relationship-info-only true
```

13. 元のデスティネーションSVMまたはデスティネーションクラスタから、元の関係を再作成します。元のSVM DR関係と同じ設定、ポリシー、およびidentity-preserve設定を使用します。

```
snapmirror create -source-path SVM: -destination-path SVM:
```



`-source-path` および `-destination-path` オプションでは、SVM名の後にコロン (:) を入力する必要があります。以下の例をご覧ください。

次の例では、元のソース SVM `'svm1'` と元のデスティネーション SVM `'svm_backup'` の間に関係を作成します。

```
cluster_dst::> snapmirror create -source-path svm1: -destination-path svm_backup:
```

14. 元のデスティネーションSVMまたはデスティネーションクラスタから、元のデータ保護関係を再確立します。

```
snapmirror resync -source-path SVM: -destination-path SVM:
```



`-source-path` および `-destination-path` オプションでは、SVM名の後にコロン (:) を入力する必要があります。以下の例をご覧ください。

次の例では、元のソース SVM `'svm1'` と元のデスティネーション SVM `'svm_backup'` の関係を再確立します：

```
cluster_dst::> snapmirror resync -source-path svm1: -destination-path svm_backup:
```

関連情報

- ["snapmirror create"](#)
- ["snapmirror delete"](#)
- ["snapmirror initialize"](#)
- ["snapmirror quiesce"](#)
- ["snapmirror release"](#)

- "snapmirror resync"

ONTAP SnapMirrorデスティネーションSVM上のデータを再同期する

ONTAP 9.11.1では、ディザスタリカバリのリハーサル時にデータ ウェアハウスの完全な再構築を省略するオプションが追加され、迅速に本番環境に戻れるようになりました。

ONTAP 9.8以降では、System Managerを使用して、保護関係が解除されているソースStorage VMからデスティネーションStorage VMにデータおよび設定の詳細を再同期して、関係を再確立できます。

再同期処理は元の関係のデスティネーションからのみ実行できます。再同期を実行すると、ソースStorage VMのデータよりも新しいデスティネーションStorage VMのデータは削除されます。

手順

System ManagerまたはONTAP CLIを使用して、このタスクを実行できます。

System Manager

1. デスティネーションから、目的の保護関係を選択します。 **Protection > Relationships** をクリックします。
2. オプションで、災害復旧リハーサル中に完全なデータ ウェアハウスの再構築を回避するには、*クイック再同期を実行*を選択します。
3. **⋮**をクリックし、*再同期*をクリックします。
4. *関係*の下で、関係の*転送ステータス*を表示して再同期の進行状況を監視します。

CLI

1. デスティネーション クラスタから、関係を再同期します。

```
snapmirror resync -source-path <svm>: -destination-path <svm>:  
-quick-resync true|false
```

関連情報

- "snapmirror resync"

著作権に関する情報

Copyright © 2026 NetApp, Inc. All Rights Reserved. Printed in the U.S.このドキュメントは著作権によって保護されています。著作権所有者の書面による事前承諾がある場合を除き、画像媒体、電子媒体、および写真複写、記録媒体、テープ媒体、電子検索システムへの組み込みを含む機械媒体など、いかなる形式および方法による複製も禁止します。

ネットアップの著作物から派生したソフトウェアは、次に示す使用許諾条項および免責条項の対象となります。

このソフトウェアは、ネットアップによって「現状のまま」提供されています。ネットアップは明示的な保証、または商品性および特定目的に対する適合性の暗示的保証を含み、かつこれに限定されないいかなる暗示的な保証も行いません。ネットアップは、代替品または代替サービスの調達、使用不能、データ損失、利益損失、業務中断を含み、かつこれに限定されない、このソフトウェアの使用により生じたすべての直接的損害、間接的損害、偶発的損害、特別損害、懲罰的損害、必然的損害の発生に対して、損失の発生の可能性が通知されていたとしても、その発生理由、根拠とする責任論、契約の有無、厳格責任、不法行為（過失またはそうでない場合を含む）にかかわらず、一切の責任を負いません。

ネットアップは、ここに記載されているすべての製品に対する変更を隨時、予告なく行う権利を保有します。ネットアップによる明示的な書面による合意がある場合を除き、ここに記載されている製品の使用により生じる責任および義務に対して、ネットアップは責任を負いません。この製品の使用または購入は、ネットアップの特許権、商標権、または他の知的所有権に基づくライセンスの供与とはみなされません。

このマニュアルに記載されている製品は、1つ以上の米国特許、その他の国の特許、および出願中の特許によって保護されている場合があります。

権利の制限について：政府による使用、複製、開示は、DFARS 252.227-7013（2014年2月）およびFAR 5225.227-19（2007年12月）のRights in Technical Data -Noncommercial Items（技術データ - 非商用品目に関する諸権利）条項の(b)(3)項、に規定された制限が適用されます。

本書に含まれるデータは商用製品および / または商用サービス（FAR 2.101の定義に基づく）に関係し、データの所有権はNetApp, Inc.にあります。本契約に基づき提供されるすべてのネットアップの技術データおよびコンピュータソフトウェアは、商用目的であり、私費のみで開発されたものです。米国政府は本データに対し、非独占的かつ移転およびサブライセンス不可で、全世界を対象とする取り消し不能の制限付き使用権を有し、本データの提供の根拠となった米国政府契約に関連し、当該契約の裏付けとする場合にのみ本データを使用できます。前述の場合を除き、NetApp, Inc.の書面による許可を事前に得ることなく、本データを使用、開示、転載、改変するほか、上演または展示することはできません。国防総省にかかる米国政府のデータ使用権については、DFARS 252.227-7015(b)項（2014年2月）で定められた権利のみが認められます。

商標に関する情報

NetApp、NetAppのロゴ、<http://www.netapp.com/TM>に記載されているマークは、NetApp, Inc.の商標です。その他の会社名と製品名は、それを所有する各社の商標である場合があります。